

『就実教育実践研究』第16巻 抜刷  
就実教育実践研究センター 2023年 3 月31日 発行

# 子どもの年齢別にみた子育てに関する 悩みについての実態調査

**Factual investigation of Parenting Concerns by Children's Ages**

鎌 田 雅 史

# 子どもの年齢別にみた子育てに関する 悩みについての実態調査

鎌田雅史（幼児教育学科）

## Factual investigation of Parenting Concerns by Children's Ages

Masafumi Kamada (Infant Education)

子どもの発達には保護者にとって喜びであると同時に戸惑いや心配事をもたらす場合もある。例えば人見知りや第一次反抗期（いやいや期）など健全な発達を示す典型的なサインに、保護者が当惑する場合も少なくない。本研究では①愛着発達、②言語発達、③食事行動および栄養摂取（以後、食事行動と記す）、④自我発達に着目し、一般的に見られる発達の変化について母親がどの程度心配事を感じているのかに関し、就学前児の母親1713名を対象としたオンライン調査を実施した。その結果、全体として1歳児母親においては言語発達や愛着発達に関して心配する傾向が強く、2～3歳児の母親においては食事行動と自我発達に関して心配する傾向が強いことが示された。さらに、母親の心配の程度を3水準（低、中、高）に分類し、子どもの年齢ごとに分布を確認したところ、1歳児母親の32.1%が愛着発達について、27.0%が言語発達について中程度以上の心配を抱えていることが示された。さらに、3歳児母親において61.2%が子供の食事行動に、48.1%が自我発達に伴う自己主張に対して中程度以上の心配を感じていることが示された。

### 1. 問題と目的

子育てに悩みはつきものである。親-乳幼児心理療法で知られるSternは、子どもが誕生することで母親が向き合い、時に葛藤を孕みながら母としてのあり方を取得していく主要なテーマとして①生命-成長のテーマ、②基本的関係性のテーマ、③援助基盤のテーマ、④アイデンティティの再編のテーマをあげている（Stern, 1995）。親にとって、『子どもを健やかに育てられるかな（私の子育てこれでいいかな？）』『よい関係を築けるかな？』『子どもが育つ環境に不自由させないかな？』『子どもだけでなく、私（母親）自身も大切にしていけるかな？』といった不安や心配は、特に子どもが低年齢の時期に多くの母親が直面する共通した心配事である。

『生命-成長』のテーマの中には、子どもが健全に成長発達していく中で、必然的に生起する親子関係の変化や心配事も含まれる。例えば、愛着の発達過程にみられる分離不安（後追い行動や強い人見知りなど）、自我の芽生えに伴う第一次反抗期（いやいや期）など

が挙げられる。これらの発達の変化は、子どもの知的発達や社会性発達を肯定的に示すサインであるが、保護者からすると子どもが情緒不安定になったように見えるため、親子間系に対する葛藤を伴いやすい。これらの発達の変化によって母親が自らの子育ての在り方に疑問を持ち行き詰まりを感じることも少なくない。思うように子どもと関わるのが難しくなった保護者が、『今までの育て方は、これでよかったのだろうか』と自問し心配になるのは、核家族化が進み、情報が氾濫し、資本主義に基づく競争的価値観が優勢である現代社会において避けがたいことであるといえる。

子どもの成長発達に伴う関わりの難しさや心配事に関し、国内外において膨大な知見が学際的に蓄積されている。しかし子育て世帯が気軽にアクセスできる体系だった情報はそれほど多くないと思われる。保育者養成校においても、現代の日本における実態を学生に対して分かりやすい形で提供可能な信頼できるデータソースは比較的限られている。

そこで本研究では、子どもの発達過程に現れる一般的な心配事（悩み）のうち、①愛着発達、②言語発達、③食事行動および栄養摂取、④自我発達の4つの領域に着目し実態調査を試みる。本研究で設定した4つの領域は便宜的なものであり、保育者養成校で扱うことの多いテーマである。また詳細な検証を行うものではなく、母親の抱える一般的な心配事の全体像を俯瞰するためのものである。各テーマを設定した理由と、一般的な発達的特徴の現れ方について以下に述べる。

#### ①愛着発達

低年齢の子どもを持つ母親に共通してみられる心配事の一つに、『子どもが親から離れられない（離れると情緒不安定になる）』というものがある。このような心配事は、子どもにとって安心できる関係が着実に育まれている過程において、子どもの認知能力が高まり、母親と離れた状況を理解できるようになることで引き起こされる。Bowlbyによる愛着発達理論（Bowlby, 1969）によれば、養育者と子どもの間に形成される愛着は4つの段階を経て発達していくとされる（第一段階：人物の識別を伴わない定位と発信（誕生から生後8～12週ごろ）、第二段階：1人または数人の特定対象に対する定位と発信（12週～6カ月頃）、第三段階：発達および移動による特定対象への近接の維持（6カ月～2, 3歳）、第四段階：目標修正的な協調性形成（3歳前後～））。

親からみて子どもが情緒不安定あるいは臆病になってしまったと感じやすいのは、愛着発達の第三段階の時期である。特に母親からすると後追いが激しく、子どもにつきっきりにならないといけなと感じたり、夫を含む他者に子どもの世話をお願いしようとしても子どもが不安定になり離れてくれなかったり、知らない場所や愛着対象者以外に対して過度に警戒したり怖がったりする様子から、子育ての在り方が間違っていたのではないかと不安を感じやすい時期である。

分離不安の強さや発現してくる年齢には個人差が大きいですが、一般的には生後6か月ごろから兆候が見られ、月齢とともに強まっていく。これは乳児の知能発達（特に『対象の永

続性 (Piaget, 1970)』に関する理解) が大きく関連するといわれている。つまり、乳児が自分にとって「安心感」をもたらす特別な関係が存在することをはっきりと理解できるように知的発達した後に、乳児がその関係から引き離されそうであると感じると、強い不安が生じ (分離不安) 抵抗しようとするようになると考えられる。一般的には、分離不安が強くあらわれる生後12~18カ月は、親子の愛着のタイプを測定するストレンジ・シチュエーション法 (Ainsworth et al., 1978) の適齢期であるといわれている。愛着発達の第3段階において不安定に耐え、安心させてもらえる経験を繰り返すことで、養育者との安心できる関係性が子どもの心の中でイメージ化して定着し『心の安全基地』を築いていく。そして3歳ごろになると、徐々に愛着が第四段階に移行する。愛着の第四段階においては『心の安全基地』が子どもの情調を安定化させる基盤となるとされる。

## ②言語発達

乳幼児期における言葉発達は個人差が非常に大きい。言語発達は遺伝要因と環境要因が強く絡み合い発現する。乳児が言語を獲得するための条件は、(1) 正常な機能を備えた中枢神経系、(2) 適切な環境からの刺激、(3) 臨界期における経験とされている。西村 (2001) によると、1歳 (臨床的には15か月) までに言葉をしゃべらない幼児は全体の約5%といわれており、発話が見られなかった幼児の40%は3歳までにしゃべりはじめ就学までに知的側面が正常範囲に追いつき言葉の遅れをほとんど残さない。54%は5歳までの発話が見られるが、学習障害や知的障害あるいは自閉症を伴う可能性が高まる。残りの6%の幼児は、大人になっても発話が見られない重篤な状態にとどまるとされている。

言語はコミュニケーションのための道具としてだけでなく、心の中で考えを纏めるための道具でもあり、また自分の行動を制御するための機能も有している (岡本, 2000)。社会生活を営む上で重要な能力であり、子どもの言語発達は保護者にとって重大な関心事の一つである。また発話は容易に他者から観測することができ、他の子どもとの違いが目立ちやすい。特に初語が期待される1歳前後や、語彙の爆発的増加が期待される1歳6か月ごろから2歳ごろにかけて同年代の子どもと実子を比較する中で、言語発達に関する不安や心配が引き起されやすい。

保護者が言語発達に不安を感じやすいもう一つの理由が、系統発達の語彙獲得の月齢変化である。子どもの語彙は初語を発してからしばらくはゆっくりと進み、子どもの心の中の言葉の理解 (メンタルレキシコン) が50語を超えるあたりから急激な発達を見せる (荻野・小林, 1999)。語彙が急激に増加する時期は、『語彙の爆発的増加時期』と呼ばれ、命名期や2語文の表出と並行して観測される。急激に発話量が増える『語彙の爆発的増加時期』のタイミングは個人差が大きく、少し遅れるだけでも見かけの発話量は何倍にも違って見えるため、保護者の言語発達に関する不安が強められる。

よって、保護者の言語発達に関する不安が顕現しやすい時期は、初語が期待される1歳から語彙の爆発的増加が期待される2歳前後の間である。また1歳6か月検診や3歳児検

診の際に発達的な問題が明らかになり経過観察となる場合も多く、1歳後半から2歳代の時期に不安をもつ保護者の割合が増加することが予測される。

### ③食事行動および栄養摂取

食事は毎日の活動であり、好き嫌いや偏食なく必要な栄養を摂取することが出来ているのかは保護者にとって大きな関心ごとの一つである（石崎・梶原・河野, 1999; 伊藤, 2016, 長谷川・今田, 2001）。母乳、離乳食、食べムラや偏食、アレルギー、食事マナーの教育など、乳幼児の食事行動に関連する心配事や不安は多種多様である。食事場面は、日常生活の中で親子の葛藤が生じやすい場面でもあることが知られている（伊藤, 2020; 大岡・内海・向井, 2013）。保護者にとっては、多忙な中で調理した食事が子どもに思うように受け入れられない場合に怒りや失意などコミュニケーション上の葛藤を感じる場合も少なくない。

灰藤ら（2021）によると、偏食は2～5歳の第一次反抗期の幼児のほとんどにみられ、成長発達に伴う生理的現象とされている。年齢とともに徐々に偏食の程度が軽くなり自然に解消する場合もあるが、子どもの食生活に関する課題として養育者の大きな悩みとなっている。厚生労働省（2015）による『平成27年度乳幼児栄養調査』によれば、2～6歳児の保護者のうち約8割が食に関する困りごとを抱えていることが指摘されている。当該の調査において選択率の高かった困りごととは、遊び食べ（2歳児）や食べるのに時間がかかること、偏食、むら食い（3～5歳児）であり、これらは5歳ごろには徐々に落ち着き始める兆候が認められることが示唆されている。

上記のように、乳幼児の食事行動や栄養摂取に関する心配事は、幅広い年代の子どもに認められるが、多くは2歳前後の第一次反抗期に並行して現れ、成長発達や親子のコミュニケーションの発達に伴って穏やかに減少していく可能性が示唆される。

### ④自我発達

第一次反抗期（いやいや期）は、穏やかであった乳児期の親子関係が激変し、新しい親子間の関りの在り方の問われる代表的な時期である。第一次反抗期は、大人の視点からは反抗しているように見える時期であるが、子どもの視点からは保護者に対する敵対心は含まれない。第一次反抗期の出現は子どもの自我の芽生えを意味し、自己理解や自律性に関する脳の成熟に伴う知的発達が大きく関わっている。第一次反抗期は前頭前野の発達に伴う自己抑制系の発達に伴い収束することが知られている（柏木, 1988）。

保護者から見ると2歳前後にみられる子どもの変化は脅威である。以前は何の問題もなくスムーズにできていた衣食住に関するコミュニケーションを子どもが理不尽に拒むようになる。子ども独自の視点でのこだわりが強く、保護者からはなぜ『いや』なのか理解できないことが多い。反抗しているのかと思うと一転して極端に甘えてくるなど、大人の視点からは一貫していないように見える行動が目立ち、どの様に接してよいか戸惑うことも珍しくない。

いわゆる『いやいや期』と言われるこの時期の特徴は、子どもの知的発達と社会的能力のアンバランスさに起因する。2歳を過ぎるころから、子どもは明確に自分の気持ちとそうでないものを区別し始め自分の気持ちを大切にしようとする。しかし表現力や情緒的な制御力が未発達であるため、大人からすると理解しがたいこだわりや理不尽な固執となって表現されたり、『いや』といった言葉足らずな自己表現に終始してしまったり、怒りや悲しみなどが制御できず情緒不安定になる結果となる。親子間でも頻繁に葛藤が生じるが、乳幼児は衝突を繰り返してフラストレーションを抱えながら自分自身の意思と向き合う練習をしている時期であり、適切な自己表現を獲得し安定的な親子関係を形成していく基礎を培う大切な時期でもある。

発達的には、表象機能が急発達し客我が安定化する1歳6か月～2歳ごろから、子どもの自我発達に伴う関りの難しさは強くなっていき、3～4歳の時期に子どもの主張性はピークを迎える（柏木, 1988）。脳の抑制機能は3歳以降も継続的に発達するため、一般的には4歳ごろには徐々に落ち着きの兆しが認められると言われている。

以上の4つの領域について、国内外で膨大な研究データが蓄積されている。しかし現代の日本において、母親がどれくらい心配事を抱えているのかという実態に関し、非専門家であっても直感的に理解出来るような客観性のある資料は十分に蓄積されていないと思われる。そこで本研究ではインターネットを利用した全国調査を試みる。

## 2. 方法

### 1) 対象者

アイブリッジ株式会社が運営する、インターネット調査サービスFreeasyにモニタ登録をしている就学前の子育てに従事している母親を調査対象とした。スクリーニング調査において、2022年の2月と5月の2回にかけて子育てをしている20代から50代の既婚女性4000名に対して、家庭内で最も年齢の小さい子どもの誕生日をたずねた。調査日の時点で未就学（0歳から6歳児）である子どもを養育する世帯を本調査の対象者とした。また、調査の妥当性を高めるために『この質問項目には2を回答してください』という、DQS（Direct Question Scale）を質問票に含み、適切な回答のあったものだけを分析対象とした（DQSについて2月に実施した調査では本調査の時点で尋ね、5月に実施した調査ではスクリーニング調査および本調査の2時点で尋ねている）。

スクリーニングの結果1718名の母親が抽出された。本調査の対象者の特質を以下に示す。母親の年齢は20歳から47歳（平均年齢32.12, 最頻値32歳, 標準偏差4.83, Q1 30歳, 中央値33歳, Q3 36歳）であった。調査対象者は47府県に広く分布しているが、愛知県（8.85%）、東京都（7.86%）、大阪府（7.63%）、神奈川県（7.57%）、埼玉県（5.59%）、千葉県（5.53%）、兵庫県（5.24%）、福岡県（4.19%）、北海道（4.13%）、京都府（2.85%）、広島県（61.93）の11都道府県が全体の61.93%を占め都市部からの回答比率が若干多い。調査協力者の家

庭で最も小さい子どもの年齢については、0歳児432名（245.15%）、1歳児464名（27.01%）、2歳児327名（19.03%）、3歳児191名（11.12%）、4歳児152名（8.85%）、5歳以上児152名（8.85%）であり、3歳未満の子どものを養育する母親が全体の71.19%であった。調査対象者がFreeasyにモニタ登録した時点での情報となるため、調査時点における正確な情報ではないが、全体の54.13%が専業主婦であった。

## 2) 調査項目

①愛着、②言葉、③食事、④自我に関する成長発達に付随する典型的な心配事を表す質問項目を各領域3問ずつ作成した。これらの内容は網羅的なものではないが、各領域における発達理論や先行知見と照らし合わせ作成された。

具体的な質問項目をTable 1に示す。①愛着については、分離不安、後追い、人見知り、②言葉については、言語発達の遅延、発話量、将来的な言語獲得に関する不安、③食事については、食べムラ、偏食、栄養摂取に関する心配、④自我については、「イヤ」という言動、情緒の乱れ、大人による介入の拒否に関する項目を設定した。

調査では、各項目の内容について、最も年齢の小さい実子について、どの程度当てはまるかに関し5件法【1全く当てはまらない、2あまり当てはまらない、3どちらともいえない、4少し当てはまる、5かなりあてはまる】で尋ねた。

Table 1 本研究で設定した4つの領域に関する質問項目

	自我	言葉	食事	愛着
<b>自我</b>				
いつもできている事でも「イヤ」と頑なに拒否しグズる時がある	.76	-.03	.06	-.01
1度「いや」と言い出すと取り乱し、落ち着かせるのが大変である	.76	.06	-.07	.06
1人でできないことも自分でやると主張し、大人のサポートを強く拒否する	.60	-.03	.02	.02
<b>言葉</b>				
言葉の発達がゆっくりな気がする	.09	.90	-.01	-.10
発声できる言葉がなかなか増えない	-.04	.90	-.02	.04
将来きちんと言葉を話せるようになるか不安である	-.06	.68	.06	.07
<b>食事</b>				
好き嫌い（偏食）が多く感じる	.05	-.02	.79	-.08
子どもの気分や体調によって、食べムラ（食べられる時と残すときの差）が激しい	.12	.01	.67	.00
十分に栄養をとれているか気になる	-.13	.05	.59	.14
<b>愛着</b>				
私がそばにいないと激しく情緒不安定になる	.06	-.01	-.02	.77
後追いが激しく私から離れてくれない	-.04	.02	.00	.75
知らない人に対して、強い警戒心を示す	.08	-.03	.08	.40
自我	(.77)	.23	.60	.41
言葉		(.87)	.31	.36
食事			(.76)	.35
愛着				(.70)

### 3) 調査の実施方法

2022年2月と5月に、スクリーニング調査と本調査を実施した。調査は、アイブリッジ株式会社の個人情報保護方針に基づいて実施した。研究者に提供されるデータには、回答者個人を特定できる情報は含まれない。調査の前段階で、本研究の概要とプライバシーポリシー、得られたデータの研究・教育用途での活用方法と回答の任意性、自由意志の尊重を表示した。すべての質問項目に回答することをもって本研究への参加に同意を得られたと判断する旨の説明を行い対象者に応諾を求めた。本調査において開示すべき利益相反関連事項はない。

## 3. 結果および考察

### 1) 因子分析

1718名の母親から得られた回答に基づき因子分析を行った。スクリーテストにおける固有値1を基準とするカイザー基準（固有値 4.01, 1.91, 1.34, 1.04, 0.725）、SMC平行分析の結果により（対角SMC 3.46, 1.45, 0.72, 0.42, -0.03, 乱数対角SMC 0.15, 0.12, 0.09, 0.07, 0.04）、調査前に想定していた4因子構造による解釈が妥当であると判断した。最尤法プロマックス回転による探索的因子分析の結果、4つの因子には事前に想定していた項目が十分な値で負荷した単純構造が認められた（Table 1）。4因子構造における確認的因子分析の適合指標は $\chi^2(24)=69.33$ ,  $CFI=.99$ ,  $RMSEA=.03$ , であり十分な値であった。各下位因子の信頼係数 $\omega$ の値は70～.87であり、各領域において質問項目を合計し尺度得点を算出するための一定の信頼性が示された。尺度得点の記述統計量、正規性検定の結果をTable 2に示す。尺度得点については天井効果や床効果は認められず、歪度や尖度にも極端な歪みは認められなかった。しかしコルモゴロフ・スルミノフ検定では正規分布には従わないと判定されたため、相関値はスピアマンの順位相関行列を算出した（Table 3）。

食事と自我の相関値が比較的大きく（ $r=.47$ , 95%  $CI[.43, .50]$ ）、食事の悩みと第一次反抗期の時期が並行するという知見（灰藤ら, 2021）と一致する。4つの領域のすべての組み合わせで弱～中程度の正の相関（ $r=.19-.47$ ）がみられた。子どもの年齢に関わらず複数の心配事を抱えている母親が一定数存在することを意味している。子どもの気質や親の認知傾向などによる共変が想定可能な一方で、本研究のデータ取得法特性上、共通手法バイアスなどによる測定誤差に起因する可能性もあるため（Podsakoff, et., al, 2003）将来的にさらなるデータの蓄積が求められる。

Table 2 下位尺度の記述統計量

変数名	有効N	平均値	中央値 (標準偏差)	歪度	尖度	コルモゴロフ・スルミノフ検定			
						統計量	p値	補正p値	
自我	1718	2.65	2.67 (0.99)	0.02	-0.72	0.10	.00	.00	
言葉	1718	2.19	2.00 (1.10)	0.72	-0.35	0.13	.00	.00	
食事	1718	2.99	3.00 (1.06)	-0.08	-0.83	0.08	.00	.00	
愛着	1718	2.46	2.33 (0.93)	0.29	-0.48	0.09	.00	.00	

Table 3 順位相関行列

スピアマンの順位相関行列		
自我	言葉	食事
	.19[.15, .24]	
		.47[.43, .50] .27[.22, .31]
	.35[.31, .40] .30[.26, .35] .29[.25, .34]	

## 2) 発達的变化に伴う心配事と子どもの年齢の関係

子どもの各年齢にみられる母親の心配事の傾向を俯瞰するため因子得点を算出した。因子得点は回帰法により、子どもに関する心配事の全年齢の平均が0、標準偏差が1に近似するように標準化されている。よって全年齢の平均値よりも心配事に関する得点が高い年齢の子どもたちの平均値は正、得点が小さい年齢の平均値は負の値を示すよう調整されている。4つの領域における、子どもの年齢と因子得点をFigure 1に示す。

愛着については、1歳児母親の得点が高齢の年代に比べ有意に大きい（Holm法による多重比較、5%水準）。言葉に関しては1歳児母親と2歳児母親の間で統計的に有意差は認められず他の年齢の母親より有意に大きかった。食事については、2歳児母親と3歳児母親の間では有意差は認められず他の年齢よりも大きかった。自我についても、2歳児母親と3歳児母親の間では有意差は認められず他の年齢の母親よりも大きかった。

以上の結果から、全体的には愛着と言語発達についての心配事は1歳ごろに多く3歳を超えると少なくなる傾向、食事や自我の発達に伴う心配事は、2歳から3歳の時期に強く表れ4歳ごろから落ち着き始める傾向が示された。さらに0歳児においては4つの領域の得点全てが1歳児よりも有意に少なく、1歳を超えるあたりから子どもの急激な発達の変化に直面し、母親が戸惑い始める傾向が示唆された。

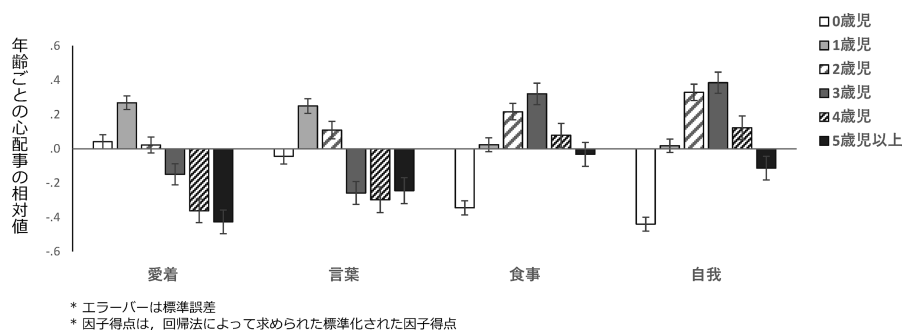


Figure 1 子どもの発達に伴う母親の心配事（子どもの年齢ごとの平均値）

## 3) 悩みを抱える母親の割合

本研究で設定した4領域に関する3項目の平均値を求めた。本稿では、便宜的に3項目の平均値が3を超え4以下である母親を中程度の心配事を持っている（中群）と判断した。3項目の平均値が3を超える要件が、どれかの項目に【少し当てはまる】を選び残りの項目に【どちらでもない】と答えるか、3つの項目のうちどれかに【かなり当てはまる】と答えることであるからである。同様の理由で、3項目の平均値が4を超える母親を強い心配を抱えている母親（高群）と判断し、母親を3つの水準に分類した。

4つの領域における年代ごとの、母親の心配事の程度に関する人数比をFigure 2に示す。愛着発達について、中程度以上の不安を持つ母親が最も多いのは1歳で全体の32.1%が該

当する。言語発達については、1歳児の母親の27.0%、2歳児の母親の24.8%が中程度以上の不安を持っていることが示された。当該の年齢の子どもを育てる母親の3～4名のうち1名は、大なり小なり不安を抱えていることを示している。

食事と自我については、不安を抱える母親の割合はさらに大きい。食事については全ての年代において中程度以上の心配を抱えている母親の割合が大きく（範囲 33.1%～61.2%）、特に2歳児（53.9%）、3歳児（61.2%）、4歳児（50.0%）において過半数を超える。自我発達については0歳児には比較的少ないものの、2歳を超えるとどの年齢でも中程度以上の心配を抱える母親の割合が大きく（範囲 29.1%～48.1%）、子育て支援において第一次反抗期を乗り越えていくための支援や知識啓発の必要性が改めて示された。但し、4歳から5歳にかけて不安を抱える母親の割合は漸減しており、子どもの発達とともに悩みが収束していく兆候が認められる。

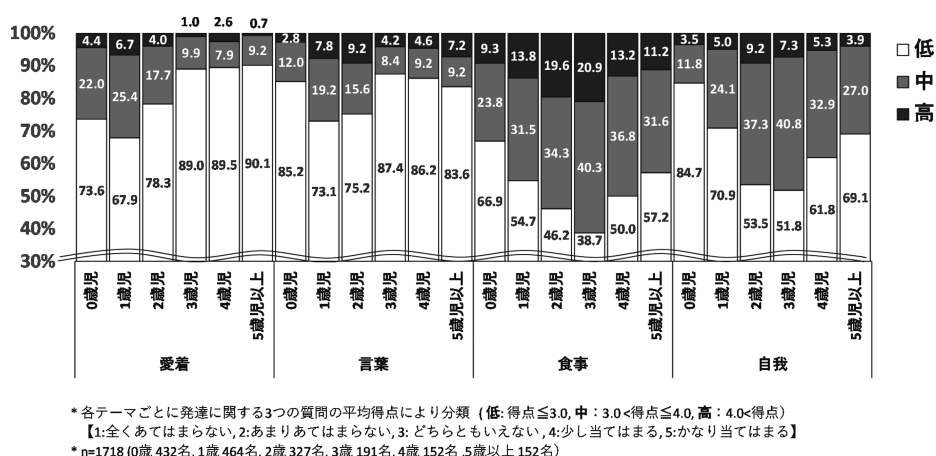


Figure 2 子どもの子どもの年齢ごとの心配を抱える母親の割合

#### 4）本研究で設定した各領域の項目の詳細

本研究では保護者の心配事の全体像を描く具体的なデータを得るために実施された。各領域における項目は網羅的ではなく、便宜的に設定した3つの項目によって測定したものである。よって構成概念の内容的妥当性は十分である保証はないため、尺度得点のみに着目するのではなく、個別の回答傾向を具体的に検討することが実態把握にとって有益であると考えられる。以下に、本研究で設定した各領域の項目に関する子どもの年齢ごとの母親の回答傾向について検討する。

##### ①愛着発達に伴う心配事について

Figure 3に愛着発達に伴う心配事の尺度得点（3項目平均）の箱ひげ図を示す。Figure 2で示したように、0歳と1歳の子どもを育てる母親の心配事に関する得点のQ3（75パーセントイル）が基準となる【3：どちらともいえない】を上回っている。

本研究で設定した3つの項目の回答分布をTable 3に示す。年齢による違いがあるかどうかを検討するために、カイ二乗検定を実施している。さらに各セルの度数について残差分析を行い一様分布から5%水準で逸脱した度数が観測されたセルに下線を引き強調している（下線太字（多い）、下線斜字（少ない））。

子どもの年齢との関係が顕著であったのは、後追いに関する項目である（愛着2）。1歳ごろに【少し当てはまる】【かなり当てはまる】の回答割合が高い。逆に3～5歳にかけては【全く当てはまらない】の選択割合が高い。もちろん3歳を超えても【かなり当てはまる】と回答した保護者もいるが少数であり、全体として3歳以降に収束していく傾向が認められる。分離不安による情緒不安定性（愛着1）についても、全体的に1歳で【少しあてはまる】の回答が多く、3歳ごろから【あまり当てはまらない】4歳ごろから【全く当てはまらない】の割合が高くなる。0歳から1歳にかけて、愛着発達に伴い不安が高まるが、2～3歳にかけて子どもは落ち着き、親子関係の再適応による心配の減少が起こると考えられる。一方で『知らない人に対して警戒感を示す（愛着3）』については、1歳児母親の【少しあてはまる】の割合が高いものの、3歳以降に選択割合が顕著に少なくなるような傾向は見られない。子どもの気質等、愛着以外の要因の影響が他の項目よりも大きい可能性が示唆される。

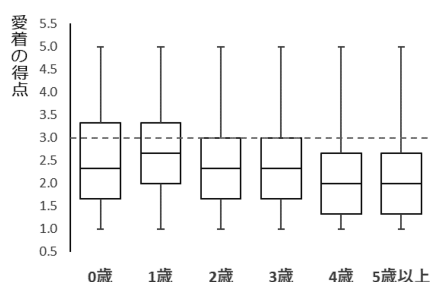


Figure 3 愛着の尺度得点の箱ひげ図

Table 3 愛着に関する項目

愛着1：私がそばにいないと激しく情緒不安定になる

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0歳	137 (31.7%)	<u>119 (27.5%)</u>	91 (21.1%)	70 (16.2%)	15 (3.5%)	432 (100%)
1歳	<u>107 (23.1%)</u>	159 (34.3%)	101 (21.8%)	<b>83 (17.9%)</b>	14 (3%)	464 (100%)
2歳	86 (26.3%)	127 (38.8%)	61 (18.7%)	47 (14.4%)	6 (1.8%)	327 (100%)
3歳	60 (31.4%)	<b>80 (41.9%)</b>	33 (17.3%)	<u>15 (7.9%)</u>	3 (1.6%)	191 (100%)
4歳	<b>63 (41.4%)</b>	52 (34.2%)	24 (15.8%)	<u>12 (7.9%)</u>	1 (0.7%)	152 (100%)
5歳以上	<b>65 (42.8%)</b>	56 (36.8%)	21 (13.8%)	<u>9 (5.9%)</u>	1 (0.7%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=72.35, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, **太字**は度数の多いセル (5%水準)

愛着 2：後追いが激しく私から離れてくれない

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	109 (25.2%)	<u>98 (22.7%)</u>	<b>100 (23.1%)</b>	92 (21.3%)	33 (7.6%)	432 (100%)
1 歳	<u>73 (15.7%)</u>	117 (25.2%)	102 (22%)	<b>122 (26.3%)</b>	<b>50 (10.8%)</b>	464 (100%)
2 歳	82 (25.1%)	107 (32.7%)	62 (19%)	61 (18.7%)	15 (4.6%)	327 (100%)
3 歳	<b>67 (35.1%)</b>	<b>57 (29.8%)</b>	33 (17.3%)	31 (16.2%)	<u>3 (1.6%)</u>	191 (100%)
4 歳	<b>71 (46.7%)</b>	48 (31.6%)	<u>16 (10.5%)</u>	<u>12 (7.9%)</u>	5 (3.3%)	152 (100%)
5 歳以上	<b>77 (50.7%)</b>	41 (27%)	<u>18 (11.8%)</u>	<u>15 (9.9%)</u>	<u>1 (0.7%)</u>	152 (100%)

$\chi^2(20)=168.01, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, **太字**は度数の多いセル (5%水準)

愛着 3：知らない人に対して、強い警戒心を示す

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	<b>114 (26.4%)</b>	126 (29.2%)	83 (19.2%)	<u>80 (18.5%)</u>	29 (6.7%)	432 (100%)
1 歳	<u>66 (14.2%)</u>	125 (26.9%)	97 (20.9%)	<b>135 (29.1%)</b>	41 (8.8%)	464 (100%)
2 歳	62 (19%)	109 (33.3%)	63 (19.3%)	65 (19.9%)	28 (8.6%)	327 (100%)
3 歳	32 (16.8%)	52 (27.2%)	<b>55 (28.8%)</b>	43 (22.5%)	9 (4.7%)	191 (100%)
4 歳	38 (25%)	49 (32.2%)	34 (22.4%)	24 (15.8%)	7 (4.6%)	152 (100%)
5 歳以上	35 (23%)	46 (30.3%)	31 (20.4%)	31 (20.4%)	9 (5.9%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=52.97, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, **太字**は度数の多いセル (5%水準)

②言語発達に伴う心配事について

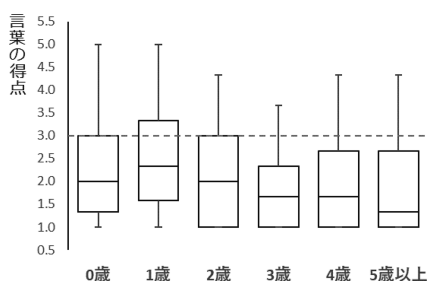


Figure 4 言葉の尺度得点の箱ひげ図

言葉の発達についての尺度得点の箱ひげ図をFigure 4に示す。1歳児において、Q3が【どちらでもない】を超えている。項目ごとの回答分布についても一貫した傾向がみられ、3歳を超えると【全くあてはまらない】の選択割合が顕著となる。ただ、3つの項目について、母親の心配が高まる時期について多少の違いがありそうである。1歳ごろに【少しあてはまる】【かなり当てはまる】の選択が多いのは、『発声できる言葉がなかなか増えない(言葉1)』である。先行知見で知られる語彙の爆発的増加時期と符合する。2歳になると、『将来きちんと言葉と話せるようになるか不安である(言葉2)』の【かなり当てはまる】の選択率が多くなる。2歳前後は言葉がなかなか出てこない子どもの様子をみている時期であり、その不安を反映しているように思われる。『言葉の発達がゆっくりな気がする(言葉3)』においては、2歳において【かなり当てはまる】の選択が最多となるが

1歳ごろから【少しあてはまる】の回答割合が多くなることから、子ども発達を観測する中で徐々に不安が募っていくものであると推察される。

Table 4 言語に関する項目

言語 1：発声できる言葉がなかなか増えない

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	169 (39.1%)	<u>97 (22.5%)</u>	<b>133 (30.8%)</b>	<u>20 (4.6%)</u>	<u>13 (3%)</u>	432 (100%)
1 歳	<u>127 (27.4%)</u>	133 (28.7%)	91 (19.6%)	<b>76 (16.4%)</b>	<b>37 (8%)</b>	464 (100%)
2 歳	133 (40.7%)	93 (28.4%)	<u>39 (11.9%)</u>	38 (11.6%)	24 (7.3%)	327 (100%)
3 歳	<b>103 (53.9%)</b>	56 (29.3%)	<u>13 (6.8%)</u>	12 (6.3%)	7 (3.7%)	191 (100%)
4 歳	<b>90 (59.2%)</b>	38 (25%)	<u>10 (6.6%)</u>	12 (7.9%)	<u>2 (1.3%)</u>	152 (100%)
5 歳以上	<b>92 (60.5%)</b>	31 (20.4%)	<u>12 (7.9%)</u>	11 (7.2%)	6 (3.9%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=200.42, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

言語 2：将来きちんと言葉を話せるようになるか不安である

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	<u>150 (34.7%)</u>	113 (26.2%)	<b>80 (18.5%)</b>	68 (15.7%)	21 (4.9%)	432 (100%)
1 歳	<u>150 (32.3%)</u>	137 (29.5%)	<b>87 (18.8%)</b>	70 (15.1%)	20 (4.3%)	464 (100%)
2 歳	131 (40.1%)	97 (29.7%)	<u>32 (9.8%)</u>	41 (12.5%)	<b>26 (8%)</b>	327 (100%)
3 歳	<b>94 (49.2%)</b>	53 (27.7%)	23 (12%)	<u>16 (8.4%)</u>	5 (2.6%)	191 (100%)
4 歳	<b>79 (52%)</b>	32 (21.1%)	17 (11.2%)	22 (14.5%)	<u>2 (1.3%)</u>	152 (100%)
5 歳以上	<b>83 (54.6%)</b>	<u>29 (19.1%)</u>	<u>13 (8.6%)</u>	21 (13.8%)	6 (3.9%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=75.56, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

言語 3：言葉の発達がゆっくりな気がする

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	169 (39.1%)	81 (18.8%)	<b>154 (35.6%)</b>	<u>11 (2.5%)</u>	<u>17 (3.9%)</u>	432 (100%)
1 歳	<u>124 (26.7%)</u>	<b>121 (26.1%)</b>	101 (21.8%)	<b>79 (17%)</b>	39 (8.4%)	464 (100%)
2 歳	114 (34.9%)	68 (20.8%)	<u>36 (11%)</u>	<b>64 (19.6%)</b>	<b>45 (13.8%)</b>	327 (100%)
3 歳	<b>95 (49.7%)</b>	43 (22.5%)	<u>18 (9.4%)</u>	23 (12%)	12 (6.3%)	191 (100%)
4 歳	<b>77 (50.7%)</b>	31 (20.4%)	<u>16 (10.5%)</u>	16 (10.5%)	12 (7.9%)	152 (100%)
5 歳以上	<b>72 (47.4%)</b>	33 (21.7%)	<u>12 (7.9%)</u>	24 (15.8%)	11 (7.2%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=216.45, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

### ③食事行動の発達に伴う心配事について

食事行動の発達についての尺度得点の箱ひげ図をFigure 5に示す。全年齢においてQ3が【どちらでもない】を超えていることから、食事行動と栄養摂取については子どもの年齢を問わず保護者の関心事であることが伺える。中央値に着目すると2歳から4歳にかけて特に心配事を感じている母親の割合が過半数を超えていることが分かる。また先行研究と符合し後述するように第一反抗期と食に関わる心配事が並行して認められる。日常的な食事場面において第一次反抗期の子どもと母親の葛藤が生じやすいことが推察され、2～4歳児に対する食事時の支援を充実させる重要性が示唆される。

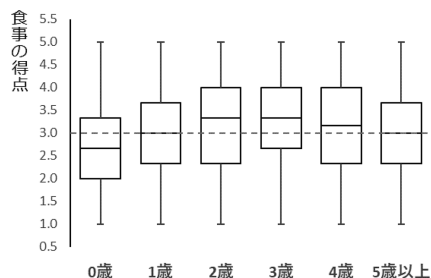


Figure 5 食事の尺度得点の箱ひげ図

Table 5 食事に関する項目

食事 1：好き嫌い（偏食）が多く感じる

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	<b>175 (40.5%)</b>	96 (22.2%)	<b>95 (22%)</b>	<b>37 (8.6%)</b>	<u>29 (6.7%)</u>	432 (100%)
1 歳	109 (23.5%)	<b>140 (30.2%)</b>	78 (16.8%)	96 (20.7%)	41 (8.8%)	464 (100%)
2 歳	<u>59 (18%)</u>	84 (25.7%)	<u>45 (13.8%)</u>	<b>82 (25.1%)</b>	<b>57 (17.4%)</b>	327 (100%)
3 歳	<u>28 (14.7%)</u>	<u>36 (18.8%)</u>	33 (17.3%)	<b>62 (32.5%)</b>	<b>32 (16.8%)</b>	191 (100%)
4 歳	<u>27 (17.8%)</u>	41 (27%)	24 (15.8%)	39 (25.7%)	21 (13.8%)	152 (100%)
5 歳以上	<u>24 (15.8%)</u>	38 (25%)	32 (21.1%)	<b>45 (29.6%)</b>	13 (8.6%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=72.35, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

食事 2：十分に栄養をとれているか気になる

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	59 (13.7%)	69 (16%)	63 (14.6%)	180 (41.7%)	61 (14.1%)	432 (100%)
1 歳	<u>45 (9.7%)</u>	79 (17%)	68 (14.7%)	195 (42%)	77 (16.6%)	464 (100%)
2 歳	39 (11.9%)	55 (16.8%)	57 (17.4%)	<u>114 (34.9%)</u>	<b>62 (19%)</b>	327 (100%)
3 歳	17 (8.9%)	34 (17.8%)	34 (17.8%)	78 (40.8%)	28 (14.7%)	191 (100%)
4 歳	23 (15.1%)	23 (15.1%)	21 (13.8%)	67 (44.1%)	18 (11.8%)	152 (100%)
5 歳以上	<b>29 (19.1%)</b>	26 (17.1%)	16 (10.5%)	69 (45.4%)	<u>12 (7.9%)</u>	152 (100%)

$\chi^2(20)=31.52, p=.049$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

食事 3：子どもの気分や体調によって、食ベムラ（食べられる時と残すときの差）が激しい

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0 歳	<b>140 (32.4%)</b>	86 (19.9%)	85 (19.7%)	<u>82 (19%)</u>	<u>39 (9%)</u>	432 (100%)
1 歳	<u>60 (12.9%)</u>	119 (25.6%)	82 (17.7%)	149 (32.1%)	54 (11.6%)	464 (100%)
2 歳	<u>29 (8.9%)</u>	79 (24.2%)	49 (15%)	<b>120 (36.7%)</b>	50 (15.3%)	327 (100%)
3 歳	<u>10 (5.2%)</u>	37 (19.4%)	35 (18.3%)	<b>71 (37.2%)</b>	<b>38 (19.9%)</b>	191 (100%)
4 歳	22 (14.5%)	34 (22.4%)	28 (18.4%)	45 (29.6%)	23 (15.1%)	152 (100%)
5 歳以上	27 (17.8%)	37 (24.3%)	25 (16.4%)	51 (33.6%)	12 (7.9%)	152 (100%)

$\chi^2(20)=147.17, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

各項目に着目すると、『十分に栄養を取れているか気になる（食事 2）』はカイ二乗値も小さく（ $\chi^2(20)=3.15, p=.049$ ），2 歳ごろに【少しあてはまる】【かなり当てはまる】の

選択がやや多いものの、どの年代の母親にとっても共通する心配事であるといえる。ただ5歳以上になると心配する親の割合は少なくなるようである。『好き嫌い（食事1）』については、2歳児、3歳児の母親にとって主要な関心事のようである。また、『食べムラ（食事3）』については、3歳児における【少しあてはまる】【かなり当てはまる】選択が顕著である。どちらも過半数に迫る母親が一定以上の心配していることから、特に第一次反抗期の子どもたちの好き嫌いや食べムラと、どのようにして織り合っていくことが出来るのかについて発達の視点から検討していく必要性が認められる。

#### ④自我発達に伴う心配事について

自我の発達についての尺度得点の箱ひげ図をFigure 5に示す。1歳以降は常にQ3が【どちらでもない】を超えている。かなりの割合で母親が、子どもの自我発達において心配を感じていることがわかる。箱ひげ図において特徴的なのは、4歳児におけるQ1（25パーセンタイル）の位置である。4歳、5歳にかけてQ1の位置が低くなるとともに中央値との差が大きくなっている。これは主張性が落ち着いてきた子ども達と、依然として第一次反抗期にいる子どもが混在し、分布が2極化し始めた兆候を示している。5歳以上においては、中央値が3を下回り【あまり当てはまらない】の方向に下がっていることから、自我発達に伴う心配事を感じている母親の割合が漸減している様子を示している。

3つの項目に関する回答分布の特徴としては、『一度「いや」と言い出すと取り乱し、落ち着かせるのが大変である（自我1）』という、自己抑制の未発達に起因する典型的な第一次反抗期の特徴は、2歳ごろに特徴的に表れ5歳ごろには落ち着く兆候が認められる。2歳ごろに【少しあてはまる】【かなり当てはまる】の選択数が最多となり、5歳以降においては【全く当てはまらない】という回答が特徴的である。『一人で出来ない事でも自分でやると主張し、大人のサポートを強く拒否する（自我2）』『いつもできている事でも『イヤ』と頑なに拒否し、グズル時がある（自我3）』については、2～3歳の時点で【少しあてはまる】【かなり当てはまる】の選択率が高い。5歳ごろになると心配を抱える母親の数は一定割合いるものの、一様分布からの逸脱は認められないため発達のな変化に伴う悩みとは別の要因が関係している可能性がある。個人差が非常に大きい、第一次反抗期は4歳ごろから落ち着きを見せ始めるという先行知見と本調査データは符合する。

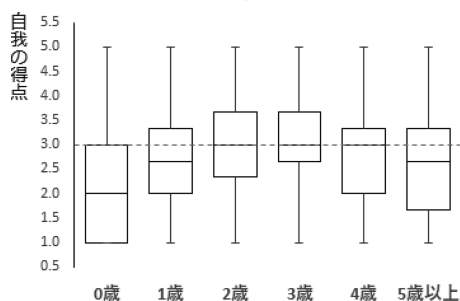


Figure 6 自我の尺度得点の箱ひげ図

Table 6 自我に関する項目

自我1：1度「いや」と言い出すと取り乱し、落ち着かせるのが大変である

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0歳	<b>171 (39.6%)</b>	<u>86 (19.9%)</u>	<b>115 (26.6%)</b>	<u>38 (8.8%)</u>	22 (5.1%)	432 (100%)
1歳	<u>85 (18.3%)</u>	<b>146 (31.5%)</b>	112 (24.1%)	103 (22.2%)	<u>18 (3.9%)</u>	464 (100%)
2歳	<u>42 (12.8%)</u>	101 (30.9%)	64 (19.6%)	<b>90 (27.5%)</b>	<b>30 (9.2%)</b>	327 (100%)
3歳	<u>22 (11.5%)</u>	51 (26.7%)	45 (23.6%)	<b>57 (29.8%)</b>	16 (8.4%)	191 (100%)
4歳	33 (21.7%)	44 (28.9%)	26 (17.1%)	<b>43 (28.3%)</b>	6 (3.9%)	152 (100%)
5歳以上	<b>45 (29.6%)</b>	41 (27%)	<u>23 (15.1%)</u>	34 (22.4%)	9 (5.9%)	152 (100%)

 $\chi^2(20)=168.90, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

自我2：1人でできないことも自分でやると主張し、大人のサポートを強く拒否する

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0歳	<b>190 (44%)</b>	<u>81 (18.8%)</u>	120 (27.8%)	<u>35 (8.1%)</u>	<u>6 (1.4%)</u>	432 (100%)
1歳	<u>65 (14%)</u>	<b>174 (37.5%)</b>	115 (24.8%)	99 (21.3%)	11 (2.4%)	464 (100%)
2歳	<u>44 (13.5%)</u>	86 (26.3%)	72 (22%)	<b>103 (31.5%)</b>	<b>22 (6.7%)</b>	327 (100%)
3歳	<u>17 (8.9%)</u>	61 (31.9%)	47 (24.6%)	<b>54 (28.3%)</b>	<b>12 (6.3%)</b>	191 (100%)
4歳	<u>19 (12.5%)</u>	54 (35.5%)	37 (24.3%)	35 (23%)	7 (4.6%)	152 (100%)
5歳以上	37 (24.3%)	50 (32.9%)	30 (19.7%)	29 (19.1%)	6 (3.9%)	152 (100%)

 $\chi^2(20)=225.87, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

自我3：いつもできている事でも「イヤ」と頑なに拒否しグズる時がある

	全く	あまり	どちらとも	少し	かなり	合計
0歳	<b>162 (37.5%)</b>	<u>90 (20.8%)</u>	<b>106 (24.5%)</b>	<u>51 (11.8%)</u>	<u>23 (5.3%)</u>	432 (100%)
1歳	<u>64 (13.8%)</u>	<b>155 (33.4%)</b>	95 (20.5%)	122 (26.3%)	28 (6%)	464 (100%)
2歳	<u>33 (10.1%)</u>	<u>64 (19.6%)</u>	57 (17.4%)	<b>137 (41.9%)</b>	<b>36 (11%)</b>	327 (100%)
3歳	<u>8 (4.2%)</u>	43 (22.5%)	41 (21.5%)	<b>77 (40.3%)</b>	<b>22 (11.5%)</b>	191 (100%)
4歳	<u>18 (11.8%)</u>	38 (25%)	24 (15.8%)	<b>60 (39.5%)</b>	12 (7.9%)	152 (100%)
5歳以上	36 (23.7%)	43 (28.3%)	22 (14.5%)	43 (28.3%)	8 (5.3%)	152 (100%)

 $\chi^2(20)=252.26, p<.001$ . 残差分析に基づき斜字は度数の少ないセル, 太字は度数の多いセル (5%水準)

#### 4. 総合考察

本研究では現代の日本の母親が子どもの発達に伴い抱えやすい心配事について、①愛着、②言葉、③食事、④自我の4つの領域に着目して実態把握を試みた。比較的大規模な対象 ( $n=1718$ 名) について全国調査を実施し、一般的な心配事の傾向を俯瞰することができた。ただ本研究の回答者は、全体として都心部の3歳未満児を育む母親に多少偏った傾向があり、将来的にさらなるデータを蓄積していくことが望ましい。

子どもの各年齢において母親の心配事に特徴的な差異がみられたが、厳密には本研究は横断的な調査であるため、例えば『2歳ごろに不安定だった状態が4歳ごろに落ち着く』といった個人内変動に基づく解釈を行うことは妥当ではない。この点を補完するならば、

将来的に追跡調査や、パネル調査を行う必要性が認められる。

本研究は可能な限り記述レベルでの分析を試みた。研究者の設定した限定的な範囲ではあるが、母親の具体的な悩みや心配している母親の割合を示すことが出来たことには一定の意義が認められる。本研究で得られた知見は、保育者養成校などで一般的に教示される発達理論と、わが国での子育ての実態との整合性を確認するためのものであり目新しいものではない。しかし本研究で得られた知見が、例えば保育者養成課程において現代の日本の母親の傾向を具体的に提示したり、子育てに心配を抱える母親に対して『悩んでいるのは一人ではない』『将来的には子どもの発達を見ることができる』とことを伝えたりするための客観的根拠の一つとなれば幸いである。

## 5. 参考文献

- Ainsworth, M., Blehar, M., Wasters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A Psychological study of the Strange Situation*. Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol1, Attachment*. Basic Books. (Revised edition, 1982) 黒田実朗ほか (訳) 1991 母子関係の理論 I ——愛着行動 (改定新版). 岩崎学術出版
- 灰藤友理子, 山川佳那子, 小瀬千晶, 吉野世美子, 米浪直子 (2021). 偏食の観点からみた幼稚園児の食習慣に関するパス解析. 日本家政学会誌, 72, 187-196.
- 石崎優子・梶原祥子・河野裕子 (1999). 都市部の育児相談を利用する母親の相談内容と健康意識. 小児保健研究, 58, 726-730.
- 長谷川智子・今田純雄 (2001). 「食物嗜好の発達心理学的研究 第一報: 幼児と大学生における食物嗜好の比較と嗜好の変化の時期. 小児保健研究, 60, 472-478.
- 伊藤優 (2016). 乳児の食事改善における連絡帳の役割 ——保護者の意識に焦点を当てて——. 小児保健研究, 86, 86-92.
- 伊藤優 (2020). 「幼児の食行動別にみた保育者の食事指導意識」, 日本家政学会誌, 71, 445-455.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 ——行動の自己制御機能を中心に—— 東京大学出版会
- 厚生労働省 (2015). 平成27年度乳幼児栄養調査.
- 西村辯作 (編) (2001). 言葉の障害入門 大修館書院
- 大岡貴史・内海明美・向井美恵 (2013). 「乳幼児の保護者が感じる食行動の問題点と食事の楽しさとの関連」, 小児保健研究, 72, 485-492.
- 荻野美佐子・小林美 (1999). 語彙獲得の初期発達 桐谷滋 (編) ことばの獲得 ミネルヴァ書房
- Piajet, J. (1970). Piaget theory. P.H. Mussen (Ed.) *Carmichael's manual of child psychology (3<sup>rd</sup> ed.)*: Vol. 1 New York: John Wiley & Sons. (J.ピアジェ 中垣啓 (訳))

ピアジェに学ぶ認知発達の科学 北大路書房)

Podsakoff, P. M., MacKenzie, S. B., Lee, J.-Y., & Podsakoff, N. P. (2003). Common method biases in behavioral research: a critical review of the literature and recommended remedies. *The Journal of Applied Psychology*, 88(5), 879–903.

<https://doi.org/10.1037/0021-9010.88.5.879>

Stern, D., N., (1995). *The motherhood constellation: a unified view of parent-infant psychotherapy*. New York: HarperCollins Publishers (スターン, D. N. 馬場禮子・青木

紀久子 (訳) (2000. 親－乳幼児心理療法——母性のコンステレーション—— 岩崎学術出版社)